

③中世のすだれ

平安時代の「寝殿造」、室町時代の「書院造」などの日本的な建築様式の発達に伴い、御簾が登場しました。御簾は室内から外の庭と一体化した空間を演出し、外部からの侵入を拒む心理的距離をおく作用も併せ持ち、また神と人、高貴と庶民を隔てる屏障具として用いられていたようです。

平安時代（794～1185年）

「枕草子」清少納言・・・

平安貴族にとって簾に囲まれた世界は、精神的安らぎをもたらす空間だったと推測されます。

＜御簾もとに あつまり出でて見たてまつるおりは＞

「源氏物語」紫式部・・・

御簾は一年を通じて利用され、四季折々の風情に応じて室内を演出していた様子が伺えます。

＜雪のひかりあひたる空こそあやしう色なき物の見にしみて 御簾まきあげさせ給＞

鎌倉時代（1185～1333年）

「鶴岡放生会職人歌合（つるがおかほうじょうえしょくにんうたあわせ）」・・・

12世紀末、京都に＜御簾編＞という社寺権門との結び付きの強い簾職人が発生し、当時の様子が描かれています。

「駒競行幸絵巻（こまくらべぎょうこうえまき）」・・・

貴族達の建物に、多くの御簾が使用されていた様子が描かれています。



鶴岡放生会職人歌合（模本） / 徳島県立博物館 所蔵



重要文化財 駒競行幸絵巻（和泉市久保惣記念美術館 所蔵）
※和泉市久保惣記念美術館HPより転載

室町時代（1336～1573年）

応永期（1394～1428年頃）、大和（奈良県）の萱簾（かやす）を京都に大量に移出の際に「奈良座」が組織され、葵祭では一条通に設けた棧敷（さじき）の簾を奉仕しました。

本所一条家の公事を勤めましたが、応仁の乱後に販路を失い没落しました。